殺意の鍵

疑惑の兄弟

星河　善光

殺意の鍵

ゴト師

そして、彼は、まだ生きていた。
「このやろー」次のパンチが左の頬（ほお）へ当たり、大地へ仰向けに倒れ、
意識が薄らぎ朦朧（もうろう）としていった。
顔、全体が血みどろになり、緑の草むらを赤く染めていった。
「やばいぜ、こいつ動かなくなった・・・」
「早いとこ、ずらかろうぜ」

都会の薄暗い夜が明け、汚れた初夏の空気が生まれ変わり、わずかに開けた窓から入り込んでいた。
一人暮らしの山岸学は料理も得意だが大食漢で、この頃、下腹が出てきた、三十四才に成ると色気より食い気である。
何時ものように、みそ汁を作っていると突然電話のベルが、激しい音で鳴った、鍋のふたを戻し、（誰だよ、こんなに朝はく・・・）と独り言を呟き受話器を取った。
それは兄嫁の山岸亜里砂からであった。
「うちの人が」その声はまるで泣き叫ぶように震えていた。
「どうしたの」
「主人が、殺されたの」
「それ、本当」
「今、連絡があったの」
（何と言うことだ）と受話器を持ったまま、学はうろたえてしまった。
受話器の向こうに言葉を詰まらせ、泣きじゃくる、兄嫁の姿が浮かんできた。
学には兄嫁の話が、（嘘であってほしい）と一途（いちず）な気持ちで、ほとんど頭に残らない。
「姉さん気を確かに持ってください、今からすぐに、そちらへ行きますから」学は受話器を置いて、安アパートの玄関ドアを開け、錆びついた階段を駆け下りた。
サンダル履きの学は急ぎ足で駅へ向かった。
行き交う人の姿も、町中の景色も普段と何一つ代わりはない、ただ違うのは動揺す

る学の心だけであった。
兄の家は、僅か二駅ではあるが、今日ほど永い時の流れを感じたことはない。
駅から続く商店街の外まで来ると、兄の住むマンションが見えてきた、近いわりには久しく来ていない。

七階でエレベーターを降り、インターホンのボタンを押すと、兄嫁は待ち焦がれていたのか、応答することもなく玄関ドアを開けた。
気落ちしている兄嫁に、学は精一杯の言葉をかけ力付けた。
「まだ兄さんだと決まった訳ではないし、間違いかもしれないよ」そんな子供だましのような言葉を繰り返した。
すると兄嫁も次第に落ち着き、平常心へ戻った。
「兄さんの殺された場所は何処なの」
「栃木のＹ市と、警察の人が言っていたわ」
「ともかく直ぐに、そこへ行きましょう」と学は言い、旅の支度をした。
玄関の鍵を閉める亜里砂の手は僅かに振れえていた。動揺は、いまだ続いている事が、学も伝わってきた。
通りへ出ると、八時半を過ぎた頃で、通勤する人の姿が混じる中、二人は急ぎ足で駅へ向かった。東北新幹線やまびこの座席シートへ座ると休む間もなく列車は、ホームを離れ北へとすべり出した。
学と亜里砂は車中では口数は少なく。互いに現状が間違いであり、夢であってほしいと、祈りを込めて列車の動きに身を任せていた。
僅（わず）かながらの集落が、平坦な畑の中にたたずんでいた。そんな傍らを過ぎ、山膚（やまはだ）をかすめながら列車は進んでいった。
虚（うつ）ろな、目で、それをみていた学は今にでも、列車のデッキから「おい、学じゃないか」と声を掛けながら、兄が笑顔で入ってくるような妄想にかられていた。そして昔、兄に助けられたことを思い出した。
もう十数年も前になる、学は人の道を外れ良からぬ稼業をしていた、通称ゴト師である。パチンコやスロットなどを不正な行為により玉やメタルを出す稼業である。その手口は、磁石を使いパチンコ玉を外から誘導して、当たりの穴へ入れると言う手口から、針金などを使う色々なイカサマが考えられた。
学は透明のセルロイド板を使いパチンコの画面の中へ巧妙に差し込んでは悪さをしていた。
一度、機械へ仕掛けてしまえば外からは見えない工夫がしてあった。

「どうですか、山ちゃん」と仲間からは学は山ちゃんと呼ばれていた。
「まぁまぁです」
「駅の反対側の店は明日開店らしいですよ」
「何時からですか」
「五時からかしいです」
「そうですか、それじゃ、明日は向こうへ行きますか」
「今日もまた、お洒落な帽子をかぶっていますね」
「安物ですよ」
「山ちゃんは、センスが良いから」
「ああ、これ、飲みますか、今さっき買ったのですが」と学は買ってきたばかりの缶ジュースを勧めた、とにかく学はおだてに弱い、すぐに木に登るタイプである。
「悪いですね、それじゃ、頂きます」
こんな会話をしながら、パチンコ台を外から操作をして玉を稼ぐ、人目を盗み悪さをする、これは立派な違法行為である。
空いている店より、混んでいる店が仕事を遣（や）りやすく、客の様子を見て負け越して熱くなっている客の隣は、特に仕事が遣りやすい。横で学が仕事をしても、そのお客は隣のことよりも自分のことで周りが見えない、そんな場所を選んで仕事をした。
そして毎日同じ店へ行くと、マークをされるため、店を転々と変えた。
「山ちゃん、高崎辺りが良いらしいですよ」
「それじゃぁ、一緒に行きますか」と遠い地方へ泊まりがけで行くこともあった。
そして、各地に知り合いが、沢山できた、宿賃を浮かすため旅館は、一部屋にゴト師たち数人で泊まることもあり、部屋では、稼いだ金ですぐにサイコロ博打（ばくち）や花札が始まる、集まるメンバーは単純な頭の者が多い「だから、ゴト師をしているんだ」と笑いながら言うやつがいた。
「ほかの仕事を考えたことはないよ」と四十過ぎの男は言った。
「捕まったことはないのかい」
「ああ、三回ほど捕まったよ」
「そのときこの稼業から、足を洗おうとは思わなかったのかい」
「一度この道に入ると、なかなか、ぬけだせないな」

「そうだよな、俺も同じだ」
「そんなことはどうでも良いから、早く始めようぜ」と車座になって、花札博打の支度が始まった。
稼いだ金を夜は花札博打、昼は競輪、競馬、負けた帰りはオケラ街道の居酒屋で安酒をあおる、また、明日になったら、ゴト師で稼ぐ、学はそんな生活に明け暮れていた。

学が何時ものように、パチンコ台の前へ座り仕事（イカサマ事）をしていると、パチンコ台の左通路から背広姿の男が歩いてきた、学にはいやな予感が走った、通常の通路を行き交う客の目つきではない、学に悟られぬようわざと目を合わせなくしている。
学は（まずい、見つかった）と思い、逃げる準備が心の中で始まっていた。腰掛けている椅子から、腰はわずかに浮いてきた、そして、行動は早く、立ち上がると同時に、反対側の通路をかけだした。通路の終わりまで来ると、体の大きな男が現れた、すき間を潜り抜け逃げようとすると、その男が、行く手を塞（ふさ）ぎ学の体は跳ね返された。
今度は左へ逃げようと向きを変えた、その時には、既に背広の男に距離を詰められて、逃げる隙はなくなっていた。両脇を二人の男に押さえつけられ、店の外へ引きずり出された。
「乗れ」とパトカーの中へ無理やり押し込められた。
隙（すき）をみて逃げだそうと試みるが、車の中は両側に刑事が座って、身動きすらできない。
車から降ろされて、警察署の中へ連れて行かれた。取調室の安いパイプ椅子へ無理やり座らされた。
学は思った（どうしてゴト師の俺を取り調べるのに、四人もの刑事が狭い部屋の中にいるのか、ゴト師の一人ぐらい捕まえても大した手柄には、ならないだろうに）とまわりの刑事の顔をつぶさに見た。
そんな学へ太った刑事が「お前には、強盗殺人の容疑がかかっているんだ」と怒鳴った。
ゴト師の容疑で逮捕なら納得するが、強盗殺人容疑とは、学には全く理解ができなかった。
「強盗って、何のことですか」と学は聞いた。
「殺人のあった、その家の防犯カメラにお前が、写っているんだ」と太った刑事が言って机を叩いて。
「ほら、この写真をよく見てみろ」
「似ているけれど私じゃぁ、ありませんよ」

「どこから見てもお前じゃないか」
「他人のそら似ですよ、それに、写真も、ぼけていますよ」
「この、写真だけではない」と別の刑事が言った。
手には透明なビニール袋に入ったコンビニのレシートを持っていた。
「証拠がここにもある」と学の目の前へ置いた。
その意味が学は理解できなく。
「このレシートは何ですか」と尋ねた。

刑事は、コンビニのレシートに記された、時刻を指して「この時刻とコンビニの防犯カメラに写るおまえの姿が、一致しているんだよ、そして、このレシートが、殺人現場に落ちていたんだよ」と大声で言った。
それを聞いてようやく、学は理解ができた。
小さな取調室のドアが開き、若い刑事が入ってきて、太った刑事へ近寄り耳打ちをした、話を聞いた刑事は頷（うなず）きながら、学へ顔を向けた。
「先ほど採取したお前の指紋と、レシートの指紋が一致した」もう言い逃れは出来い、ざまぁ見ろと言わんばかりに笑みした。
「お前は、三日前の七時頃、どこで何をしていたのだ」とアリバイを聞かれた。
「家にいましたよ」
「それを証言する者は」
「独り者ですから誰もいませんよ」
「他人（ひと）事じゃないんだぞ」
「分かっていますよ、でも、やっていませんよ」
「それじゃ、どうして、レシートが殺害現場に落ちているんだ」
「分かりませんね」
「とぼけても無駄だ」
「とぼけてなんかいませんよ」
「早く、はいて、楽になったらどうだ」
「何度も言うように、やっていませんよ」
「嘘をつけ、証拠はあがっているんだ、とぼけるな」
刑事は何度も大声を出し、ありきたりの態度で机を叩く。
「やってませんよ」と学は同じ答えを言い続けた。
今まで横で、話を聞いていた別の刑事が「まあ、時間は幾らでもあるんだ、ぼちぼちやろうか」とその刑事は、現場でたたき上げた浅黒い顔で、椅子をたぐり寄せて座った。「おまえは日頃から、良からぬ事をしているそうだな」とゴト師のことをにおわせ、恫喝（どうかつ）してきた。
今回は強盗殺人の容疑だ、ゴト師の件で脅されても、今まで一度も捕まった事はなく、怯（ひる）む思いはなかった。

まして、強盗事件は全く身に覚えのないことだ。
学は眠くなったが、電気スタンドを顔にあてられ眩（まぶ）しくて寝かしてはもらえなかった。
「眠たいか、それじゃ、素直に、はいたらどうだ」
辛く、長い取り調べは朝方まで続いた。
有り難いことに弁護士の兄は、次の日に警察へ面会に来てくれた。
学は兄を見るなり「兄さん、俺じゃない」と学は必死に叫んだ。
「分かっているさ、必ず出してやる」
「頼むよ、兄さん」
「無実の証しを、直ぐに探してくる」と兄の孝史は学と別れ、その足で学のアリバイ探しを始めた。
事件があった、その日、学は現場とは反対方向の競輪場から帰ってきたと言う、家に着いた頃、その事件は起きている、学の家から犯行現場まで、車で四十分以上はかかる、
時間的に犯行は不可能である。

兄はその競輪場へ行ってみた、たくさんの人間がそこにはいた、この中の誰が学と会ったとしても、探し出すのは不可能だ、だれ一人、学のことは覚えているはずもない、それでも兄は出店の屋台や警備員へ声をかけた。
「この写真の男を見ませんでしたか」と聞いて歩いた。
「見ていませんかね」と学を見たという者は現れなかった。
競輪場から駅に続く商店街を一軒ずつ隈（くま）無く聞いて歩いた。
「見ませんね」「見ていませんね」「覚えていませんね」と学を見たという者は現れなかった。
兄の孝史は、今度は学の住んでいる周辺の聞き込みを始めることにした。
学が部屋へ帰ってきたのが七時頃だと言っていた。
その時間に会わせるために、兄孝史は公園のベンチに腰をおろし、学のことを思い浮かべた、今ごろは取調室で刑事に怒鳴られているのではないか、その姿が目に浮かんできた一刻も早く劣悪な取り調べの環境から学を救い出してやらなくてはと孝史は思った。
公園のベンチで時を過ごし、事件の起きた七時になって、孝史は道行く、一人一人に学の事を聞いてみた、そして、事件のあったあの夜。
「電気の工事をする車が、あそこへ、止まっていました」と買い物帰りの主婦は言った。
「どんな形でしたか」
「ライトバンです、それで、屋根にハシゴを積んでいました」
「何色の車ですか」
「白っぽかったかな」
「名前が書いてありませんでしたか」
「名前は分からないのですが、絵が描いてありました」
「絵ですか、どんな絵でしたか」
「ウサギの絵です」
「ウサギですか」
「はい、ウサギの顔です、そのとき一緒にいた娘が指さして喜んでいましたので、でもその人が見たかどうかは分かりませんが、あのアパートの向かいで、工事をしていたようですよ」

「ありがとうございます」礼を言って孝史は電気工事店を探し尋ねた、その店は駅近くにあった。
「ええ、あの日ですか」と店主らしい男が言い、
「あの日・・・担当は鈴木ですね、あの辺りの工事をしたのは・・・」と作業ノートを見ながら答えた。
店主は奥にいた鈴木を手元へ呼んだ。

「確かお前だよな、あそこの工事は」と店主が聞いた。
「はい、夕方ごろ外灯工事をしていました」
孝史は「この男ですが」と写真を見せた。
「見ましたよ」と味気ない答えが、かえってきた。
孝史にとっては大事なことでも鈴木にとっては意味のない事であった、そのため、素っ気ない返事をしたのだ。
「ええ、二階の右隅の部屋ですよね、この人は、くわえ煙草をして洗濯物を取り込むところでした。私もヘビースモーカーでして、俗に言うホタル族一人で、家では子供がいるため、寒い日も雨の日も、ベランダへ出て煙草を吸っているのです。自由に煙草を吸える人が羨ましくて、今でもその事を覚えていていますよ」鈴木は警察で犯行のあった、その時間、学の姿を見たと証言した。
コンビニのレシートが現場に有った、その謎は後になって簡単に解けた。
被害者は二人で一人は殺害されたが、残りの一人は意識不明の重体だった。数週間後、意識を取り戻しレシートのことが解明された。
それはパチンコ屋でパチンコをしているとき。学が煙草を吸うためズボンへ手を入れた。そして煙草を出すとき紛れてレシートが落ち、隣に座る被害者の買い物籠（かご）に入った。む家へ戻ってみると覚えのないレシートが出てきたと言う。
これは学が、釈放されてから分かったことであった。
「兄さんありがとう」学は兄の手を握って釈放の喜びを伝えた。
「大丈夫か、疲れただろう、帰って俺の家で風呂でも入っていけ」と気遣いながら言ってくれる優しい兄であった。
「大変だったわね、温かいスープをたくさん作ったからどんどん食べてね」と亜里砂の作る夕食を御馳走（ごちそう）になった。
独身の学にとっては、心に染みる家庭料理であった。
それを期に学は改心して、ゴト師の悪行から足を洗った。
学が兄との思い出にふけていると、列車は鬼怒川を越え淡々と田園地帯を進みＹ市へ着いた。石畳のホームへ降り、木製の跨線（こせん）橋を登ると、乗ってきた列車の遠く小さく離れて行く姿がそこにあった。
二人は人の流れに身を任せ改札口へ進んだ。

遺体の確認

玄関の石段を上がり、所轄の暗い廊下を進んだ。
「遠いところご苦労様です」と刑事は霊安室の扉を開けた。
（心の片隅で間違いではないか、間違えであってほしい）と願う思いで、学たちは中へ入った。刑事が遺体の顔を覆う白い布を取り除いた、その様子を二人は恐る恐る覗（のぞ）いて見た。
そこには、まぎれもない兄の遺体が、眠るように静かに横たわっていた。
夫の死を確認した亜里砂は、堰（せき）を切ったように涙があふれ出て泣き崩れ、心の中を悲しみが荒波となって胸に突き刺さった。
それを学も感じ、体の中の力が抜けていった。兄の顔は傷だらけで無残な死に顔だ、何者かに殴り殺されたと刑事は言った。
そして部屋を変え事件の説明を受けた。
「数人の犯行ですね」と年配刑事が言った。
その刑事に「犯人の心当たりはありませんか」と訪ねられたが、見当が付かない二人は首を横へ振った。
「山岸さんの亡くなった現場から、このキーホルダーの欠片が見つかりました。現場は広範囲にわたり草が薙（な）ぎ倒され、かなりの争いがあったと思われます、その折れ重なった草の中から、これが見つかりました」と見せられた物は、星形の中にイニシャルが彫られ、そこにはローマ字のＭと書かれていた。
「これは争ったとき、山岸さんか、犯人のどちらかが落とした物です」とキーホルダーの欠片を渡された。
「見覚えありませんか」と続けて刑事が聞いた学と亜里砂は手に取って見たが、
「覚えがありません」学は言い兄嫁の顔を見ると、見覚えがないと首を横へ振った。
「そうですか、それでは犯人の物ですね」
今まで横で話を聞いていた、背の高い刑事が「山岸さんはトラブルを抱えていたとか、そのような事はなかったですか」
と聞いてきた。
「そのようなことは全くありません」と亜里砂が答えた。
「変わった様子はなかったですか」

「別に変わった様子は感じませんでした」と亜里砂が答えた。
「ああ、そうですか・・・」
「それで、夫の死んだ場所は遠いのですか」
「そうですね、車で十五分程です」
二人は、その現場へ行く事にした。
「ご苦労さまでした」と年配の刑事が見送ってくれた。

殺害の場所

所轄から駅へ向かう道は、商店も疎（まば）らで行き交う人も殆どなかった。
振り返ると、通り過ぎるように、近づいてきた、そのタクシーを拾い、運転手へ（殺人のあった場所）と告げると、すぐに分かり走り始めた。
この小さな町で起きた、殺人事件のため話題になっているようだ。
タクシーは街中から、徐々に遠ざかっていった。
暫くすると街中とは一変して、緑の濃い景色へ変わっていった、車は日光北街道を右折して山道を進んで行くと、周辺には民家は全くなくなり、タクシーの運転手は「あそこですよ」と指をさし車をとめた。
その場所は、木立が茂り一度中へ入ると、人の姿を隠してしまい、山道から人影は見えない程であった。
学と亜里砂は、体に触れる草木を掻（か）き分け中へ入った。
現場は縄が張り巡らされ。まだ捜査官がいた。
「身内の者です」と、告げると。
「ここですよ」孝史が殺され、横たわっていた場所へ案内された。
そこへ亜里砂は、やさしく花をたむけ合掌した。
草木がなぎ倒され、この場所で、かなりの争いがあったことが、二人にもすぐに分かった。
先ほどの刑事から、複数の犯行と聞いている、
兄が惨殺されたことは、遺体の傷と現状をあわせみればよく分かる。
兄が殴り殺される姿が、学の目に浮かんできた。
亜里砂は学と同じ思いなのか、その場から目をそむけ「何故（なぜ）」と言い、手で顔を覆いながら場所の移動を始めた。
学はいたわるように、亜里砂の肩へ手をかけ、慰めながら車へ戻ることにした。
肩を落とし、待たせておいた、タクシーへ戻ると、運転手は二人を見て、察しが付いたのか「ご苦労様です」と静かな声でドアを手で開けながら言った。
駅へ着いて、ホームのベンチに腰を預け、列車の着くのを待ちながら、学は考えていた。
なぜ、弁護士の兄はこの街へ来たのだろう。
それとも、犯人に連れてこられたのか。

なぜ、殺されなければ、ならなかったのか。
遠く、小さく見えた、帰りの列車は大きく近づいてきた、その列車に座り動き始めた事も、幾つかの駅を通り過ぎたのも、目には映らず、学はため息混じりに車窓を眺めていた。

帰りの車中は来た時よりも、もっと重い気持ちになり、ほとんど二人には会話がなかった。
互いに車窓に映る、別々の幻想絵を見ていた。
緑の多い景色から、気がつくとコンクリートの連なる灰色の風景へ変わっていた。
列車が亜里砂の住む駅に着いた時は、もう日は落ちていた。

亜里砂の住み慣れたマンションへ学も一緒に着いた。
亜里砂はバックから鍵を出して、鍵穴へ差し込む、その手にはもう震えはなかった、鍵を回した、その瞬間、学と亜里砂は顔を見合わせた、玄関の鍵が開いている。

案の定、家の中は何者かが入り、足の踏み場もないほど、荒らされていた。
亜里砂は部屋を見回し、盗まれた物がないか探してみた。
「これといって、取られた物は無いようね」と言った。
大切な物は全て有るようだ、金目の物を取られた気配がない、僅かながらの現金も残されていた。
亜里砂の宝石類も、無くなった物は、見あたらないと言う。
「兄さんを殺した犯人か・・・」と言い転がっている瓶を手に取り。
「兄さんの死は行きずりの犯行ではなく、確実に何かを狙っての事ですね、兄さんから何か、預かりませんでしたか」と学は聞いた。
「預かった物は何もないわ」
「兄さんが何か持ち帰って、大事にしていた物とか有りませんか」
「見たことは・・・ないわ」
「ともかく警察へ連絡しよう」と言いながら学は受話器を持ち上げた。
ほどなく数人の警察官が来て、調べを始めた。
鑑識やら刑事などで、部屋の中は騒然とした。
その間、二人の心から孝史が死んだ悲しみが、どこかへ姿を消していた。
ベテランの刑事は「これはプロの犯行だ」と呟いた。
「タンスも下から開けてあり、手慣れた者の犯行ですね」若い刑事が後に続いて言った。

「ただの物取りの犯行ではあるまい」とベテラン刑事が言った。
「なぜですか」
「書籍などは手を付けていない、押し入れの奥などを捜しているようで、何か目的の物があるのだろう」
「そうですね金目の物は残っているし、通帳もそのまま残っていますね」

今ここにいる刑事と兄の殺された警察とは、管轄が違い、兄が殺された事は、この刑事たちには分からなかった。
すると学は担当刑事に「実は兄が昨日、殺害されまして」と簡単に兄が殺害された事を話した
刑事は「それじゃ、その事と関係しているのか」と言い、殺しの手掛かりが出てこないか、念入りに捜査が続いた。
「捜し物は、さほど小さな物では、なさそうだ」とベテランの刑事が言うと。
「なぜですか」若い刑事が訪ねた。
「これを見てみろ」とベテラン刑事は指をさした。その先には手のひらへ載る程の空き箱があった、「小さな物を探しているのなら、この箱の蓋（ふた）を開けているはずだ」小箱を手に持ち蓋を開けながら、ベテラン刑事は言った。
「確かにそうですね、小さな物を探す時は、小瓶や小さな箱まで開けて、中を確かめるはずですね、それが手を付けられていない、それに三面鏡に付いている小さな引き出も、開けられていませんね」と若い刑事は頷（うなず）きながら捜査を続けた。
学と亜里砂は椅子に腰をおろし、その成り行きを見つめていた。
（犯人は兄のことを知り尽くしている、家も分かり、また兄嫁が、家を留守にすることまで分かっている。部屋の鍵は兄から、奪った物であろうか、犯人は捜し物をもう見つけてしまったのか）と学が考えていると。
「駄目ですね」と管理事務所へいった、二人の刑事が戻ってきた。
「防犯カメラにも、それらしい者は写っていませんね」と残る一人が言った。
「防犯カメラの死角をかい潜り侵入しているのか、かなりの手慣れた者のらしいな、指紋はどうかね」と年配の刑事が聞いた。
「全く、出ませんね」
「げそ痕も出ませんね」と別の捜査官が言った。
長い時間をかけ、捜査が行われたが、指紋や足跡など、犯人を特定する物は何も採取できなかった。
捜査官と刑事の調べが終わったのは、かなりの時間が過ぎ、辺りも真っ暗になっていた。

極楽トンボ

青い空の下に、見慣れた建物が連なっていた。
七階から見える景色は、今日も大きな変化はない。
兄の殺害事件から一か月ほどが過ぎた、警察の捜査は大した進展がなく、行き詰まっていた。
それでも「キーホルダーの販売先が分かりました」と電話があった。
「どこですか」
「ええ、二十数か所の観光地の売店でして、その何処で売られたかは、残念ながら全く分からないのです」と連絡をしてきた刑事は言った。
そのキーホルダーは学の住む近くは浅草雷門の売店で売っていた。
それを聞き学はそこへ行くことにした。
浅草仲見世に、その店はあった。
ローマ字の付いた星をイニシャルに組み合わせ自分好みに作る物で、学も一つ買ってみた。そして、亜里砂の部屋へ戻った。
「姉さん、これが犯人の持っているのと同じ物です」
「このキーホルダーの星が取れたのね」
「そうです、それが現場に、落ちていたのです」
「犯人はこれと同じ物を持っているのね、そして、ここへ来たのね」
「ええ、それで部屋中を荒らしています」
憎い犯人を捜すため、学と亜里砂は、兄の遺留品をくまなく調べた。
椅子へ座り、アルバムの整理をしている学へ
「お茶でもどうぞ」と言って亜里砂は紅茶を入れた。
小さい頃の古い写真が出てきた、それを見ながら、学は遠い昔を懐かしく振り返った。
兄は頭が良く勉強ができた。
反対に学は頭が良くない、けれども、体には自信があった。
学の性格は極楽トンボのお人好しと、親から言われほど気さくあった。
性格は変わるのか、友人に金を貸しては逃げられ、そんな裏切りを何度も経験しているうちに、生き方が変わってゆき極楽トンボも学から飛び去っていった。しかし、今でも時折、トンボが現れては頭へ止まる、その都度、損をすることは幾度

かあった。
兄弟仲は良く、二人でよく遊んだ。
頭を使う遊びは、何時も兄には勝てない。
「おい、学、この俺の作ったパズルを解いてみろ」
「よし簡単さ」と言って悩む学へ。
「やっぱり、無理だろう」と兄は笑みをこぼした。

兄は早くもパソコンへ興味を持ち、アセンブラ言語とやらを勉強していた。
学にはゼロと一だけが、たくさん並んでいるだけで、何がなにやら全く分からなかった。
それでも兄は、そのアセンブラを説明してくれた。
「これが、コンピューターの基本だぞ、ゼロと一の二進法でコンピューターは演算して動き、その組み合わせで色々な仕事をしている」と説明されたが、学には全く理解はできなかった。
小さな頃から学が兄に勝てるのはスポーツだけであった。
「兄さんキャッチボールをやろうか」
「じゃ裏の空き地へ行こう」
「ぼくがグローブを持って行くから、兄さん先に行って」
兄を野球に誘い、ボールが上手く取れない姿に学は笑った、兄はそんな学を見て夢中になってボールを投げ返してきた、日暮れまで遊んでいたことも屡々あった。
夏、海へ行くと兄は泳げず、海辺で貝などを拾い、学の泳ぐ姿を羨ましく見ていた。
「兄さん、必ず人は浮くのだから、それを信じて、怖がらずに・・・そんなに手足をばたばたさせないで」
「やっぱり、駄目だ、沈んで行くような気がして、足を直ぐについてしまう」
泳ぎを教えるのだが、これまた極度の運動オンチでなかなか覚えられなかった、また水が顔にかかるのが怖いらしく顔を水へ付ける事ができなかった。
兄は一度、池の縁から足を滑らせ、中へ落ちて溺（おぼ）れかけたことがある。
それがトラウマになり水が怖いらしい。
結局、大人に成っても、泳げず仕舞いであった。
或る時、兄が二人組の不良に絡まれた事があり、たまたま、学が通りかかり、その不良を蹴（け）散らしたこともあった。
学が活躍するのは、そんな体力勝負の時だけだった。
兄の手解きでパズルや暗号を学も作り、張り合うこともあった。
親に内緒のことは暗号で、二人は連絡を取り合った。
「同じ暗号では、他人に分かってしまうので、暗号を解く鍵を決めおこう・・・い

いか、数字の配列・・・数字と文字の組み合わせ・・・文字と言葉の組み合わせ・・・」とメモを書きながら学兄弟だけの数個の鍵を決めた。
夏休みの宿題は兄にやってもらい、学は遊び惚けて親に何度も叱られた。
遠く離れていった思い出を呼び戻し、それに酔いながら、兄の遺品を整理していた。
そんな、ある日、静まりかえった部屋の中を、電話の音が鳴り続けた。

「山岸さんは、おられますか」と低い男性の声がした。
「夫は亡くなったのですが・・・」
「亡くなったのですか、何時ですか」受話器の向こうで驚くような声がした。
「一か月近く経ちますが、どちら様ですか」
「長野の田中と言います、昨日、待ち合わせの場所へ、山岸さんが現れないので、普段は山岸さんから連絡を頂くのですが、昨日一晩、山岸さんからの連絡を待ったが、連絡がなく心配で、自宅へ電話をかけました」とその男は言った。
「どのような事ですか」
「ある事件のことで、山岸さんに相談をしていたのですが」それを聞き、亜里砂は受話器を学へあずけた。
「兄の事件と関係があるのでしょうか」と兄が殺害された説明をする前に、焦りが先に出て学は訪ねた。
「私には、その事は分かりませんが、一か月ほど前に山岸さんから連絡もらい、昨日、会うことになっていました」
「一か月も前ですか」
「はい、しかし山岸さんはどのようにして、亡くなったのですか」
「殺されまして」
「殺されたんのですか、どのように」
「殴り殺されたようです」
「殴り殺されたとなると、私の頼んでいた件と関係があるかどうかは分りませんが」
「電話では詳しい話が分からないので、お会いして兄のことを教えて頂けませか」と学は願い出た。
田中はこころよく、引き受けてくれた。
兄が亡くなって一か月近くが過ぎたが、警察の捜査は何の進展もなく、気落ちしていた学たちには、目の前が、開けていくように思えた。
田中に会えば、学の知らない兄のことが何か分かる。
子供の頃の兄はよく分かるが、大人に成ってからの事は全く分からない、仕事は弁護士をして真面目な人柄であり、学とは大きな違いがあった、子供の頃のように喧嘩をして肌が触れることはなく、顔や腹など殴り合って、温もりを感じる事も

今はない。
田中なら、大人の兄を知っている。
「姉さん、田中という人に会えば兄さんのことが何か分かると思います」
「ええそうね、直ぐに会いに行きましょう」
殺害の手掛かりが、そこにあるのではと学は思い、長野県飯田へ行くことにした。

長野への旅

東京駅から新幹線のぞみは、名古屋に向かった。
駅で見つけた、長野県の観光資料を学は読んでいた。
それは、タブロイド判に書かれた、数行の飯田市についての案内であった。
信州で最も南にあり、南信州広域連合を形成する、人口十万人を超える市で、南信地方では最大の人口を擁する。
県内では長野市、松本市、上田市に次ぐ四位
で、江戸時代には飯田藩の城下町として栄えたと書かれていた。
「田中さんは、うちの人にどんな事を頼んでいたのでしょうか」と亜里砂が言った。
「そうですね今回の事件に関係あるのでは」
「それで殺されたのかしら」
「今は何とも言えませんが」
車窓から見える富士山を横目にして列車は進み浜名湖を越え名古屋へ着いた。
ここからは高速バスで、中央自動車道を通り飯田市へ向かった。
高速バスは名古屋を出発して、恵那市（えなし）を通過した。
暫くすると中津川市から長野県阿智村を結ぶトンネルを潜った、八キロ強の長大トンネルを抜ける山並みが続き、その代わり映えのない山系を過ぎると急に視界が開け、残りわずかな時間で終着駅へバスは着いた。
二人は音を立てバスのステップを掛け降りた。
無論、学も亜里砂も飯田市は初めてである、
「ちょっと化粧室へ行ってくるわ」と亜里砂は言った。
「ええ、ここにいます」
学はポケットから煙草を取り出し、火を点し、旨そうに、煙草を吹かした、バスの中では我慢をしていたので、煙が喉から腹に入り煙草の香りに頭がふらつくような気持ちになった。
一服の味わいに満足をしたころ。
「おまちどおさま」と亜里砂が戻ってきた。
「そこの、タクシーで行きましょう」
駅前に並ぶタクシーで、ホテルへ二人は向かった、そこは、ワンメータで到着す

るほど近くにあり、思いのほか立派な作りであった。ロビーには喫茶コーナーもあり、数人の泊まり客であろう人が寛（くつろ）いでいた。
ホテルのカウンターで二人は鍵を受け取り、エレベーターで、それぞれの部屋へ入った。

マリとの出会い

亜里砂は身仕度を調えロビーへ向かった。
エレベーターを降りると、フロント前に見覚えのある顔がそこにはあった。
丸顔で小柄な女性の姿だ、髪の毛はコアラの耳のように束ねてあり、一度見たら忘れないほど印象深い髪型だ。それを見たのは先ほど、駅でのことで、亜里砂が化粧室の出口へ向かったとき、入れ替わりに入ってきたのが、その女性であった。
その時、体が触れあい女性の持っていたバックが、床へ落ちて、中身が散らばってしまった。
それを二人で拾い集めながら互いに「ごめんなさい」と謝ったことで顔は覚えていた。
「先ほどはごめんなさい」と言いながら、その女性は亜里砂をフロント前の喫茶コーナーへ誘った。
亜里砂と女性はコーヒーを飲みながら自己紹介をした。
真っ赤な服を着た女性は、
「加瀬マリ子です、マリと呼んでください」とコーヒーカップへ砂糖を運びながら言った。
歳は二十歳を過ぎた頃に見え、顔にまだあどけなさが残っている。
そこへ新聞紙を片手に持ち、学も現れ話に加わった。
「山岸学です」
「マリですよろしくお願いします」
「どこから来たの」と学が聞いた。
「静岡です」
「こちらには、お仕事ですか」と亜里砂が尋ねた。
「はい、仕事で」
「失礼ですが、どんなお仕事なの」亜里砂は、
派手な髪型が気になり訪ねてみた。
「はい、芸能関係です」
「芸能関係と言うと、女優さんなの」
「いいえ、モデルです、と言ってもカタログなどの商品紹介のモデルです」
「今日のお仕事は終わりなの」

「撮影は明日です」
「でもお一人なの」
「ほかの人は明日来ます」
亜里砂とマリは意気投合して話がはずんだ。

話の内容はたわいない、化粧品や洋服等の話へ変わっていった。
学は殆ど聞き役に回っていた。
話を終えた頃には、十年来の友人のように亜里砂とマリは打ち解けていくように学には思えた。
亜里砂も時折笑顔を見せた、暫（しば）し兄の事を忘れているようだ。
盛り上がる二人を残し、学は一人先に風呂場へ向かった。
学は露天の湯船に浸（つ）かりながら、兄の死に付いて考えてみた。
兄はなぜ、殴り殺されなければ、いけないのか。
ただの殺害が目的ならば、ほかにも方法がある筈（はず）だ。
兄は何かを知ったため、口封に殺されたのか、でも、それならば刃物などでもっと簡単に殺しているはずだ。
何かを聞き出すための拷問で兄を、殴り殺したと考えるのが妥当であろうと思われる。
兄の自宅へ忍び込んでまで、探す物はいったい何なのか、犯人は、その捜し物を見つけてしまったのか、もしも、その捜し物が見つからなければ何らかのかたちで、学たちへ接触があるのではと、考えていた。
捜し物は小さな物ではない、兄の部屋の荒らし方から考えると。
「手荷物サイズでしょう」とあの時、刑事も言っていた。
でも、兄嫁は「そのような物は見たこともないわ」と言う。
家へ持ち込まず誰かに預けたのか、でも、命に関わる物を簡単に預ける相手が何処にいるのか。
そして、あの、キーホルダーの持ち主は何処にいるのか思いを巡らせた。
湯船の岩肌から、立ちのぼる湯煙は、夜空に消えて行く、月光が湯の面をキラと照らし出し、その湯につかり、明日会う兄の知人に謎を解く鍵を期待していた。

田中との出会い

その日は朝から雨が降っていた、ホテルを出て指定され喫茶店へ、学と亜里砂は向かった。
「あそこのようですね」と学は指を差した。なだらかに続く坂の中程に、その小さな喫茶店は有った。
中へ入り空いている席へ、腰をおろし、田中が来るのを待つことにした。
五人ほど座れる、カウンターの中に口ひげを生やしたマスターらしき男が、コーヒーサイホンを使いコーヒーを入れていた。
カウンターの下に取り付けられた止まり木が、数多くの傷を残し、永いこの店の歴史を物語っている。
間もなくして、ハンチング帽をかぶり、日焼けした顔の男が店内へ入ってきた。
会釈をしながら、学たちの前の席に座った。
見知らぬその男が、迷わず学と亜里砂の前へ来たのには訳があった、店の中は数人の客がいたが、学と亜里砂だけが、向かい合わせで座らず、横並びに座り話もせずに雛人形のように座っていた、それを見て男は近づいてきたのだ。
その男は「初めまして田中です」と自己紹介をした。
「お世話になります」と学たち二人は、丁寧に挨拶をした。
「実は私、この町で刑事をやっていまして」と田中は驚きの発言をしたのだ。
浅黒い顔も、学たちへ近付いてきた態度や、勘の良さも刑事と言う事で納得ができた。
ウェイトレスが注文を取りに来た、田中は学たちの前に置かれたコーヒーカップを指さしながら「同じ物を」と言った。
「かしこまりました」と言いカウンター奥へウェイトレスは戻っていった。
そのタイミングをみて「兄とは、どのようなお知り合いですか」とまずは学が尋ねた。
　「昔、山岸さんと　写真同好会で一緒に行動していたのです、もう八年以上も前のことですが」ポケットから煙草を取り出しテーブルの上に置きながら話を続けた。
「私が秋田にいる頃です、山岸さんとは趣味が一緒でよく風景写真を撮りに、各

地を歩き回りました」過ぎし思いに溶け込み、話を更に続けた。
「八年ほど前に、単身赴任でこの地へ住み着きまして、その時に写真同好会は、辞めました、そのため、山岸さんとは長い間、会うことが無かったのですが、夏の初めです偶然、再会をしまして山岸さんが、駅へ向かう所でした」

「この町へ、兄は何をしに来たのですか」と訪ねると。
届いたばかりのコーヒーを一口飲んで「その時、カメラを手にしていたので『まだ写真をやっているのだね』と聞くと、彼は『今は滝の写真を主に撮っています』と笑顔で言っていました」と田中は答えた。
兄がこの町へきたのは、滝の写真を撮るだけだったのか、ほかに目的はなかったのか、学がいろいろ考えていると。
「この町には美しい滝が、幾つも有って、それで来たのだと彼は言っていましたよ」太い眉をこすりながら田中は言った。
田中と兄の孝史が、写真同好会で腕を競っていた頃、孝史は山と湖の写真を撮っていた。
だが今は滝の美しさに魅せられて、仕事の暇をみて、各地を歩き回っているのだと、兄は答えたと田中は言った。
「その晩、私の所へ、山岸さんは泊まっていったんですよ。八年振りですから話が盛り上がり、かなり遅くまで話し込んでいました。そのとき、私が今、追いかけている事件の話したのですが」と言い、ごそごそと、脇へ置いた、黒い鞄の口を開けて中から「実はこれですが」と一冊の週刊誌を学と亜里砂の前へ差し出した。
開かれたページには［疑惑の兄弟］と書かれていた。
学がページに目を落とし、数行読み始めると田中が付け加えて「この事件のことで、あなたの、お兄さに協力して頂きまして、山岸さんは、シャープな感覚を持っていまして、写真同窓会の時も、いろいろ知恵を借りました。この事件の手掛かりを何か無いかと相談したのです、間もなく私は定年でして、長い間、追いかけてきた、この事件の解決を手土産として、田舎へ帰ろうかと思っていまして」自分自身へ言い聞かせるように言った。
田中が、この町へ来た時、起きた事件で、もう八年の月日が流れた、いまだ解決ができないでいる。
偶然にも、再会のできた、鋭い山岸の直感に、期待をして事件の解決方法を相談したと言う。
田中の話を聞いた兄は、事件のからくりに閃（ひらめ）くものを感じ取って、そして「少し時間をください」と言ったと言う。
学は、兄の孝史が子供のころよりパズル等は得意としているため、閃く物があって

も当然と思えた。
「山岸さんは『八十パーセント程の閃きですので、構想が固まってから話します』と言っていました」

「八十パーセントですか」
「はい、そして後日、この町の近くまで来る事があるので、その時に、また会いましょうと別れました」
「それで、一昨日会う約束だったのですか」
「ええ、事件の解決が目前と思っていたのですが、残念です　山岸さんは殴り殺されたという事ですが、犯人の目処（めど）はついているのですか」
「それが全く分からないのです」
「電話で部屋が荒らされていたと言われましたが、取られた物はあったのですか」
「何も取られていません」
「ただの、物取りではないのですね」
「はい、捜していた物は手荷物ほどの大きさでないかと、地元の警察の方が言ってまた、兄はここへきた時、手荷物を何か持っていませんでしたか」と学は訪ねてみた。
「カメラ以外は何も持っていませんよ」
「誰かに追われているとか」トーンを落とし聞いた
「そのようなことは何も聞きませんでした」
「犯人について、何か心当たりは有りませんか」学は逆に訪ねた
「そうですね、心当ですか、全く思いつきませんね」と思い浮かべるようにして田中は答えた。
「田中さんの事件と、兄の事件は関係があるのでしょうか」
「それは、何とも言えませんが」
「トリックが解けたので、犯人に殺されたとか」
「はあ、それは、どうでしょうか」
「トリックについて兄は何と言っていましたか」と学が聞いた。
「詳しいことは、山岸さんは一言も言わなかったのです」
田中は残念そうに言って、残りわずかなコーヒーを飲み干し。田中は思った、
・・・・（今はもう山岸孝史はいない、頼る者はなくなった、学と出会ったのも何かの縁）と思い田中はその事件の詳しい説明を始めようと思った。
また学の方は、兄の事件の何らかの手掛かりが、そこにあるのではと、田中の話を聞きたいと思っていた。

喫茶店の中がにわかに、混み始めてざわつきが大きくなった。
「場所を変えませんか」と田中は自分の家でゆっくり、話しましょうと二人を誘った。

田中の部屋

喫茶店の外へ出ると、朝から降り続いた雨もすっかり上がっていた。道、行く人は傘を折りたたみ、足取りよく歩いていた。
田中の家は幾つかの角を曲がり、飛び越せそうな、どぶ川へ架けた橋を渡り、路地を入った、突き当たりに有った、小さな家だった。屋根は赤く、まるでおもちゃ箱から出てきそうな家である。
学たちは部屋へ案内され、用意された座布団へ座った。
（そうか、兄もここへ来て、そして、泊まっていたのだ）と学は思った。
田中はお茶の支度しながら「女房と子供は秋田にいるのですよ、生まれも育ちも秋田でして」と言った。
田中は時折、東北訛（なま）りが出る、そのことは秋田生まれという事で、理解できた。
出されたお茶を啜（すす）りながら、詳しい話を田中が始めるのを待っていた。
座布団に腰をおろした田中は、三冊のスクラップブックをテーブルに置いた。
いよいよ詳しい話が聞けるのかと学は生唾を飲む思いであった。
「これまで調べた資料です」と田中はスクラップブックを学の前へ差し出した。

疑惑の兄弟

田中はスクラップブックを開き、緩やかな口調で話を始めた。
疑惑を持たれている佐伯健二と兄佐伯裕太は神奈川県大和市で生まれ育った。兄裕太が五才の時、父親が浮気をして出来たのが健二である。
健二の母親は本妻を追い出し居着いてしまった、そのため裕太は弟健二を憎く思い、いつも目の敵にした。
兄裕太は健二を奴隷のようにあつかった。
そして、兄は要領がよく、自分の犯した間違いを健二になすり付けた。部屋で遊んでいる時、バットを振り回し、父親の大事にしていた骨董の壺を壊したときも。
「俺じゃあないよ、後ろから健二が背中を押したんだよ」
兄は言葉巧みに父親を納得させ、簡単に許してもらった。怒られたのは弟の健二だけだった。そして健二は殴られ食事抜きとされ、ひもじい思いをした。
兄の裕太に強要され、近所の柿を盗んで捕まったことがある、兄は垣根の陰に隠れて様子を見ていて、（やばい）と分かると一目さんに逃げてしまった、柿を盗んだのは兄と一緒なのに捕るのは健二だけだった。
大人になったある日「ばかやろー」隣近所へ聞こえそうな大声で健二は目を覚ました、父親の怒鳴り声だ。それは朝日が昇り始めていた頃であり。
兄が酔って朝帰りをして、父親と口論になり怒鳴られていた。
その事が引き金となり兄は家をでることになった。
兄が二十三を過ぎ、健二は十八を回った頃だった。
「こんな家、出て行こうぜ」
「何処へ行くの」
「遠く離れた、町さ」
兄が健二を半ば、強制的に誘って家を出た、その引っ越し先が埼玉県の川口である。

古ぼけたアパートを借り、兄は警備のバイトを始めた。弟健二は近くのスーパーで働いた。
健二の仕事は倉庫から段ボール箱を運んできて、小さな箱へ小分けしてショーケースへ陳列する事が主な仕事であった。
兄の裕太は道路工事の交通整理が日課で、真夏は照りつける太陽の光で、地面は熱くなり照り返しが顔へ突き刺さった、水分を取っても直ぐに汗となって出て行ってしまう、けして楽な仕事ではない。
冬になると外仕事のため、寒さが身に染みた
裕太はこの仕事を何時は、止めようと思っていた。
そんなある日、裕太が昼の休憩で、煙草をふかしスポーツ新聞を見ていると同僚が、その新聞を横からのぞき込んで「これって儲（もう）かるだってよ」その記事を指で押さえつけて言った。
裕太は小さなその記事を読んだ。
ギャンブルマシンで荒稼ぎ、その末に殺し合いと書かれた記事だ。
稼いだ金の分配で喧嘩になり、相手を殺して捕まったと書いてあった。
同僚が言うのは、その稼いだギャンブルマシンのことだ。
金の分配を巡り喧嘩になる、どれほど稼いだのか裕太は興味がわいた。
「そんなに、儲かるのか」と同僚に訪ねた
「こんな所の安給料より何倍にもなるさ」と
日焼けした顔で同僚は答えた。
その機械は、通称アングラマシン　（ギャブルゲーム機）と言い、金を賭けて博打を行うゲーム機だ、当然違法である、裕太は直ぐに健二を思い浮かべた。あいつにやらせれば良い、得意の口車で、健二を無理やり、その裏の道へ誘い込んだ。
こうして二人はアウトローへ一歩踏み込んでいった。

アングラマシン

裕太は新宿にいた、おんぼろな車で同僚から教えられた場所へ急いでいた。
隣には健二が乗っていた、大久保のガードを潜った、周りには、ぴかぴかに磨き上げられた車が行き交うそんな中、車幅を狭くする思いで、その車は目的地へ向かった。
それは新宿から中野の間にあり、十坪程の小さな店だった。
「いらっしゃい、電話を頂いた方ですね」と細身の男が奥から出てきた。
テーブルゲーム機が五台と縦型のゲーム機が三台置いてあった。
「麦茶でもどうですか」と二人に椅子と同時に勧めた。
「このゲーム機はロタミントといって、ドイツ製なのです」
「使い方はどうするのですか」
「百円玉を入れると、この三つのドラムが回転をします、数字が合えば当たりでメタルが出てきます」
「何枚出てくるのですか」
「当たった数字によりますが、最高二十倍のコインがでます」
その機械を、手に入れた二人は、喫茶店やスナック、居酒屋へ置いて歩いた。
儲けは店側と裕太の折半である。
そして、そのゲーム機は一日で、裕太が警備委員で稼ぐ日当の数倍を稼ぐこともあった。
当然違法行為であり、最初は裕太も罪悪感にさいなまれていたが、時がたつにつれその感覚が麻痺（まひ）していった。

そして稼いだ金は盛り場のネオンの中へ消えていった。裕太は酒を浴びると、俺には金のなる木があるのだと吹聴して歩いた。
悪銭身につかずで、金は残らなかった。
そんな稼ぐ機械も半年ほど続けると、飽きられて売り上げも落ちて行き、長続きはしなかった。
しかし、一度この道（アングラ)に入るとなかなか抜け出せない。
そして時は流れてポーカーゲーム機が売り出された。
ゲームの当たりは、掛け金の二倍のツーペアから五百倍のロイヤルストレートフラッシュまであった。
「健二、これからはポーカーゲーム機だ」と裕太はいち早く、ポーカーゲームを買い入れ、喫茶店へ置いた。
そのゲーム機は人気が出て三台、四台と増えてゆき、喫茶店の中はポーカーゲーム機だらけになっていった。
「集金に来ました」
「はい、結構やっていますよ」
「本当ですね」と機内の中を覗き、裕太は千円札をわしづかみにして、テーブルの上に広げた。
喫茶店も最初のうちは売り上げも上がり、喜んでいたが、純喫茶と名乗っていた店は客層が変わって行き。店側も確かに儲かるが、純喫茶の名前を守るためにポーカーゲーム機をやめてゆく店が増えていった。
二人はポーカーゲーム機を置いてくれる店を探し歩いたが、この頃になるとなかなか、そんな店は見つからなかった。
「店舗を借り、俺たちで喫茶店をやろう」健二と共に裕太はポーカーハウス（ゲーム喫茶店）を始めることにした。

開店

駅近くにある不動産屋の張り紙を裕太と健二は見ていた。
窓ガラスの居抜き店舗十五坪のチラシへ目がとまった。
「これにするか」兄裕太が健二に言った。
兄は健二の返事を聞く前に不動産屋のガラス戸を開けていた。
「この町は都心からは少し離れているが、情報によれば、既に何軒かのポーカーハウスがあって、客も集まっているらしい」と不動産屋の店主がお茶を入れる背中を見ながら弟健二へ耳打ちをした。
不動産屋に案内された、その場所で店を開くことにした。
そこへ六台のポーカーゲーム機を並べた。
客は捨て看板（電柱に括り付ける看板)で集めた。
客は直ぐに集まってきた、それは、ほかの店から梯子（はしご）をして、流れてきた。
客は少しでも儲かる店を探して、渡り歩くようだ。
飲み物と簡単な食べ物は無料で出した。
「いらっしゃい」
「また来たよ」とその客は言った。
「まいど、どうも、飲み物はサイダーで良かったですか」と健二が接客をした。
「ああ」と言いながらポーカーゲーム機に取り付けてある識別機へ千円札を投入してゲームを楽しんだ。
出された飲み物を何度もお代わりして、一日中ゲームを続ける者もいた。
閉店後に裕太が現れてゲーム機を開けると中から千円札が束になって出てくる。
売り上げは全部裕太が持ってゆき、健二は給料で働いた。

同じ場所で永く続けると警察に摘発される可能性が増すため各地へ足を伸ばし、店を変えた。
ポーカーゲーム機は不滅とも言われ、永く人気が続きしたため、ゲーム機に色々なイカサマが考え出された。店主の意のままに、ストレートフラッシュやフォーカードの役を操る事のできるゲーム機が考え出された。
それは、遠隔操作で役を操り、客層を見て出したり絞ったりした。
店によってはサクラをつかい、遠隔操作で客寄せをする店もあった。外から無線を使って目的のゲーム機へ電波を送り、それを受けた機械は仕掛けられた基板のスイッチを開閉する、それにより機械のペイアウト率が変わるゲーム機が作られた。
要するに詐欺である、しかしポーカーハウスそのものが違法であり、全てはアウトローの世界のことである。
「何番台だ」裕太が電話で健二に聞いた
「四番台です」
「分かった、フォーカードを仕掛ける」
電波を送ると店の中では
「やったー、フォーカードだ」と客は喜んだ。
そして、ほかの客をあおった。
店の外にある駐車場から、裕太が遠隔操作で客の様子を見てゲーム機のペイアウト率の上げ下げを行った。
裕太の店も、イカサマ機械を使って荒稼ぎをした。
客離れが進むと、また、店を探して違う町へ
移って、ポーカーハウスを始めた。
当然、警察に対しての経営者は健二であり、摘発されたとき全て健二が責任を取るように店を借りたときの契約も、電話の名義も健二になっていた。
万事抜け目なく裕太は手配を行った。

健二の恋人

公園の小道へ、紅色の葉が舞って落ちるころ、
色づき始めた、木々の間を健二と真弓は肩を振れながら歩いた。
二人が知り合ったのは、二か月ほど前のことで。
ファストフード店で、同じタイミングにレジカウンターへ向かい、その時、順番を譲り合ったのが、話のきっかけとなり。
「学生さんですか」健二が聞いた。
「今年卒業しました」と真弓が答えた。
昼下がりの公園でベンチへ座り、二人は話をした。
その公園に今日も来ていた。
「仕事は慣れた」
「ええ、だいぶ慣れました」
「真弓さんは実家から会社へ通っているの」
「いいえ、今は女の友達と一部屋借りて住んでいます」と細面の色白な真弓は言った、口調は品のある、育ちを語る程であった。
健二は今まで、そのようなタイプの女性には会ったことがなかった。
何度か会うにつれ、次第に健二は真弓に心を引かれていった。
今では、週に一度の割で会っている。
公園の静かな場所を選び、手ごろなベンチへ腰を下ろした。
「今日はお弁当を作ってきたの」真弓は青いバスケットからサンドイッチを取り出した。
健二は手作り弁当をこうして、食べるのは初めてであった。
ひざの上へ置いたサンドイッチを見ながら健二は、今やっている、ポーカーハウスのことを真弓に話すことを迷っていた。
「お仕事は何をなさっているの」
「ええ、営業関係の会社へ勤めています」と嘘の話をしているからだ。
健二は兄と今やっているポーカーハウスをいずれやめ、堅気の仕事に就こうと思っていた。
真弓へ動く気持ちが、兄との溝を更に深めていった。
（兄とはいずれ手を切らなくては)と健二は考えていた。

二十八年間、兄に奴隷のような扱いを日々されてきた、決別する日は近いと感じていた。
しかし、独立することを兄へ、今日切り出すか、明日にしようかと、ずるずると迷っていた。

「お茶をどうぞ」
「どうも有り難う」
「熱いから気を付けて」
「ああ、はい」
遠くに子供のボール遊びをする姿が、目に映ってきた。
それを見る健二を見て「子供は、お好きですか」と真弓が尋ねた。
「はい、好きです」
もし、真弓と一緒になれたら子供をたくさん作って賑（にぎ）やかな家族を作ろうと、そんな思いで、真弓を見ると優しい目をして微笑んだ。
このまま、明日という日がこなければ、あんなアウトローの生活に戻らなくてもいい、
いっそのこと、真弓を連れて兄の元から逃げようか、そんなことが頭を過ぎつては消えまた浮かんでくる。
遠く子供の声が届く中、将来の夢を互いに語り、その夢の温もりにくるまっていった。
真弓の気持ちを確かめた、真弓は健二が言うがままに、心を溶かした。
真弓と会っている時の流れは速く、直ぐに別れを連れてきた。
こんな事もあった、真弓が熱を出し寝込んだときがあり、その時、健二は真弓の部屋まで見舞いへ行った。玄関のブザーを押すと真弓と同居する押田美子が出てきて、真弓の所へ案内された、真弓は布団くるまり、寝ていた、起こさず、見舞いの花を置き健二は、押田美子に後の事は願いをして、その部屋を立ち去った。
次の日、真弓から連絡が入り。
「昨日は、わざわざ来て頂き、ありがとうございました」
「体は大丈夫なの」
「はい、良くなりました」
「それは良かった」
「今日の夕食でも、よろしければ、一緒にどうかと思いまして」
「はい、喜んで行きます」
その日、真弓の部屋へ行くと、すき焼きの用意がしてあり、押田美子も交え、ビールで快気祝いの乾杯をした。

三人は。それぞれの夢の話に花を咲かせ、時の経つのを忘れるほど盛り上がった。
健二は腹一杯のご馳走とほろ酔い気分で真弓の部屋を後にした。
冷たい夜風が火照った頬を冷やして行く、その心地よさと、真弓の温もりを感じ家路を急いだ。

常習賭博

雲が陽を遮えぎり、薄どんよりと、街の姿が冷たく感じた。そんな一日が終わろうとしていたころ、健二が何時も通り、ポーカーハウスの営業をしていると一人の男が入ってきた。
「いらっしゃい」と健二が声をかけた。
その客は店の中を見回すと、空いているポーカーゲーム台を眺めて遊ぶ台を探し始めた。
その時、店には二人の常連客がいた。
その男は黒い野球帽をかぶり、手にはスポーツ新聞を持っていた。
一見客と思い「飲み物は何にしまか・・・」と健二は接客の準備を始めた。
一、二分後に、次の客が現れた。体格の良い丸顔の男だ、その客は先に入った男と目を合わせ、うなずく仕草をした瞬間、大きな声をあげ「そのまま　そのまま動くな」と常連客二人を牽制した。
もう一人の男は健二を押さえにかかり、外部と連絡することを絶つため、腕を掴（つか）んで動きを封じ込めてきた。
動こうとした客に「動くな」と一言、言ってその刑事は睨（にら）みを利かせた。
そのタイミングで、外で待機していた残りの刑事が入ってきた。
そして、常習賭博の現場検証が始まった。
写真を撮る者、物の配置を計測する者。
有線放送が静かに流れる店の中が、一瞬で慌ただしくなった。
常連客は「今、写真を撮るからポーカーゲーム機を指さしながら座れ」と確かにゲーム賭博を行っていた証拠写真を撮られていた。
健二は刑事たちの行いをただ黙って見ていた。
現場の検証が終わったのは、二時間程後であった。そしてパトカーで警察署へ運ばれた。
健二は小さく暗い、窓もない取調室へ入れられた。汚い机、安い椅子、そこへ健二は座らせられた。
「すいません、私が全部やりました」と健二は犯行を認めた。
「主犯は、お前じゃないだろう」
「私がやりました」

「それじゃ、ゲーム機の鍵を持っていないのは、どういう訳だ」
健二を捕まえたときにポーカーゲーム機内部を開ける鍵を持っていなかった。この事から刑事は主犯が他にいると見ていた。
鍵は売り上げを管理するため、兄裕太が持っていた。

「何度も言うように、無くしたんです」
「嘘を吐くな・・・主犯が持っているんだろう」
警察の内偵は数週間の張り込みをして、店へ出入りする客、車などマークしていた。
当然その中には、兄裕太の姿もあったはずだ。
そして警察は兄裕太が主犯とみている。
そのため、取り調べは永くなる事を健二は覚悟していた。
同じくして捕まった二人の常連客も取り調べを受け、一晩泊まり次の日に帰された。
客の場合は単純賭博となり、殆どは小言程度で許されるが。その内の一人は近くのスパーマーケットの店長であり、単身赴任で寮に住んでいたが、一晩帰らず。
「店長はどうしたの」と店では騒ぎと成っていた。
「朝になっても、帰ってこないんです」
「それじゃ、警察へ連絡しますか」
「それが良いと思います」
「スーパー宝ですが、うちの店長が、昨日から帰らないのですが」
「お宅の店長はこちらで一晩泊まっていますよ、心配はいりませんよ」
言うまでもなく、この店長は出世を諦めたという。
健二の取り調べは、客の証言も参考にして続けられたが、客の居ないときに、兄は店へ来る、そのため、客は兄弟の事情を知る由もなく客からの情報では、主犯は健二と言っていた様子だ。
取り調べに対して、主犯は健二自身だと主張を続け、三日目に連絡役に兄が用意した弁護士が会いに来た。
「全部、私が、やりましたと話していますから」と兄へ伝えてほしいと頼んだ。
「そうですか、裕太さんも、それで安心します」と弁護士は言って帰っていった。
取調室の中では毎日、同じ事を聞かれた。
「主犯のお前が、何故、鍵を持って無いだ」と何度も怒鳴られた、そのたびに鍵は紛失したと健二は言いはった。最後まで全て自分一人で行ったと頑張り続け、取り調べは二十一日間続いた、そして健二は兄を守りきった。

友人

健二は警察の玄関を出た、振り返ると結構年季の入った、汚れの目立つ建物だった。
連れてこられた時は夜おそく、建物を見る余裕もなく、中へ連れて行かれた。この中に二十一日もいたのかとしみじみ眺めた、健二は刑事の取り調べに屈せず今日、はれて釈放と成った。
間を置かず、その足で、健二は真弓の部屋を訪ねていた。
チャイムを鳴らすと、部屋から真弓の友人の押田美子が現れた、健二の顔を見て驚くように「何処にいたの」といきなり、強い口調で怒鳴られた。
健二には何のことか理解が出来なく、あ然としていると、腕を引かれ、部屋の中へ連れて行かれた、そこには、白い布にくるまれた遺灰あった、
「真弓よ」と美子が言った。
この時健二は、頭を強く殴られた感触を受けた。
「何故」とそれから先の言葉が続かない。
健二は畳の上に膝を落とし、座り込んだ。
驚きで体中の血が無くなってゆく思いで、力が抜けていった、暫く白い遺灰を眺めていた。
「本当に何処にいたの」とまた、美子が言った、それには、答えようが無く黙っていた。
「真弓は自殺をしたのよ」と強い口調で言った。
健二はその時まで、真弓の死は病気によるものと思っていたが、自殺と聞いて、「どうして、真弓は自殺をしたのですか」と美子に聞いた。
「あなたの、お兄さんの所為よ」
「あにの・・・」と理解ができないでいると。
「そうよ、あなたのお兄さんに殺されたの」
と自殺の原因は兄に有ると、次第に落ち着きを取り戻し、美子は詳しい話を始めた。
それは、二週間ほど前のことだという、兄裕太が訪ねてきて、大事な話があると、真弓を誘い出した。
それは、丁度、健二がゲーム賭博で摘発され留置所で取り調べを受けているときの

ことだ
（俺が全ての罪をかぶり、取り調べに耐えていたとき、兄裕太はここへ来て真弓を誘い出したのか）と思いながら、美子の話を聞いていた。
真弓を誘い出した裕太は、健二のことで大事な話があると言い、言葉巧みに車で真弓を連れ出し、酒を利用し、腕ずくで思いを遂げたという、それを苦にして、真弓は海へ身を投げた、その話を聞いた、健二は悲しみと怒りが一つになり胸の中にこみ上げてきた。
（兄が憎い・・・　・・・　・・・）
この長い話を田中は一端終え、冷たくなったお茶を入れ替え学たちへ勧めた。
そして、また話を続けた。

裕太の死

「その事件が起きたのは、八年前のことでして」と今度は、裕太の死んだ時のことを、田中は話し始めた。
街の中心部から離れた、住宅街で佐伯裕太が拳銃で自殺をした事が、警察へ通報があったのは翌日十時頃で。
「兄が拳銃で、自殺をしたのです」と弟の健二から電話があり。
「もしもし、落ち着いてください、場所はどちらですか」
「さつきヶ丘です」
「それでは、すぐに向かいます」と拳銃での自殺であり、検査官を含め警察関係者、六名が現場に入った。その中に、就任したての田中刑事もいた。
この町へ来て右も左も全く分からない頃の事件でもあった。
通報をしてきた弟の佐伯健二は「今日、出先から帰ってきたら、兄が死んでいたので」悲しげな顔をして言った。
「あなたが、発見されたのは何時頃ですか」と年配の刑事が聞いた。
「十時頃だったと思います」
「その時、玄関の鍵は掛かっていましたか」
「はい、掛かっていました」
「帰宅した貴方は、どうされたのですか」
「帰宅を知らせるために、兄の部屋へ行きました」
「そこで、発見されたという事ですね」
「はい」と健二は頷いた。

現場となった部屋は兄裕太の書斎であった。
三点セットの黒い皮のソファーと、その横に机が並べてあった。
遺体は机の椅子から転げ落ち、床に俯（うつぶ）せに倒れた状態であった。
拳銃は遺体の横に転がっていた、それはアメリカなどでは、女性が護身用に持つ、二十二口径の小さな物だった。
「遺書は有りませんね」若い刑事が田中に言った。
部屋の中もクローゼットの中なども、荒らされた気配もなく、机の上に置かれた物も何一つ倒れていない。
外部からの侵入者は全くないように見えた。
「これは完全な自殺ですね」と先程の若い刑事が言った。
「拳銃使用の自殺だ、そう簡単には事はすまない、拳銃の入手経路を調べろ」と上司が言った。
捜査官は引き出しや本棚などを、ごそごそと拳銃の入手の手掛かりを探し始めた。
飾り棚の引き出しから、三丁の拳銃が出てきた。
その拳銃を手にしてみると、軽いモデルガンである、死んだ裕太はガンマニアだったようだ。
しかし、本物をどのようにして、手に入れたのか、この場では解明できなかった。

拳銃

窓に掛かるブラインドの透き間から、僅かな日が机に零れていた、その、木洩れ日とは全く縁のない男たちが会議を始めていた。
田中はメモ帳を見ながら、ざわつく周囲の話を聞いていた。
前の方で偉そうに座る上司が机を叩いた。
「静かに」とその一声で、水を打ったように会場は静まりかえった。
ざわつく原因は自殺か他殺かで揉めていた。
意見は、ほぼ真っ二つに割れていた。
他殺と主張する者の意見とは。
「自殺とされている裕太は、拳銃で左からこめかみ辺りを打ち抜いて死んでいます。裕太は右利きであり、もし自殺をするのなら拳銃を右手に持ち、右のこめかみから撃つと思われます」と手帳を見ながら若い刑事が言った。
「半分死にたい、半分は助かりたいと心の迷いで、その時だけ左手に拳銃を持ったのではないでしょうか、小さな拳銃のため、左手で引き金を引くことは、十分あり得ると思いす、それに、右利きでも、左手を器用に使う者もいます、左のこめかみ辺りから、銃弾が入っているので、他殺と言うのはどうかと思います」
「それでは、銃弾に微量なプラスチックが付着していた事は、どう説明するのだ、銃口から弾丸が発射され、被害者に当たるまでの間にプラスチックが挟まったと思われる。なぜそのようなことが起こったのか」
「拳銃の音を消すため、何か使ったのでは」
と若い刑事が言った。
「自殺を覚悟した者が、そのような事が必要なのかね」とほかの刑事が答えた。
「現場を隈（くま）無く探したが、そのようなプラスチックは見つかりませんでした」
「拳銃を机の中にしまっておいて、何かゴミでも、銃身に着いていたのでは」
との意見があり、会議ではプラスチックについては、さほどの意味はないと無視されていた。
「拳銃に血痕が付いていません、誰かが裕太を殺して、その後、拳銃を死体の近くへ置いた、そのため、血痕は付いていないと思います」
「あの晩、裕太を訪ねた者はいません、その証拠に防犯カメラには誰も写っていま

せん、裕太の死んだ部屋も争った後もなく、現場に他人が進入した痕跡（こんせき）が全くありません」と自殺説の刑事は言った。
「自殺をする、動機は何ですか」と逆上して他殺説を主張する者がいた。

「他殺と言うが、全て推論にすぎない」と強く反対意見を返す者もあった。
更に、自殺と言う者の意見は、
「拳銃は裕太自身の物であり、他人があらかじめ、その拳銃を用意して、犯行を行うことは難しいと思います」反論していた。
「拳銃の指紋は」と前へ座る刑事が偉そうに言った。
「拳銃からは裕太の指紋以外は、発見されませんでした」と若い刑事は椅子から立ち上がって答えた。
「死亡推定時刻は」
「はい、昨夜十一時頃です」
「それは、確か」
「はい近所の学生が英会話の勉強で、レコーダーを使っていまして、その録音の中に銃声が残っていました」
「それが、十一時という事かね」
「はい、銃声以外の音を調べたところ、別の部屋から流れるテレビの音も一緒に録音されていまして、それにより正確な時間が、確定しました」
「第一発見者を疑えと言うのが、本筋では有るが」
「はい、第一発見者の健二は、兄裕太が自殺をしたとき、列車で三時間以上離れた場所にいて、立派なアリバイがあります」
裕太の周辺に殺害を行うような者は、浮かんでこなかった。結局自殺と判断され、捜査本部は立ち上がらず、捜査は一週間ほどで打ち切られた。
暫くすると話題にもならず、忘れられていった。
田中は今でも他殺と信じて、暇をみて捜査をしている、ここまで追い続けた維持もあり、必ず解決して、周りの同僚へ見返そうと思っていた。
事件当時は他殺という者も、月日が経つにつれ
「あれは自殺だね」と気持ちを変える者が増えていった。
田中の気持ちもその度、揺らいでしまった。そして八年の月日が過ぎた。
「仲間には『カビの生えた事件など、忘れてしまえ』と何度も言われました」と遠くへ去っていった、思い出を追いかけながら田中の話は終わった。

学の部屋

ポプラ並木の影を踏み、足早に、学と亜里砂はホテルへ戻った。
田中の話と借りてきた、八年の重さのスクラップブックを持ち帰り、思案を巡らしていた。そんな部屋をノックして、マリが訪ねてきた、ケーキの箱を手に持って「一緒に食べようと思って買ってきたの」と学と亜里砂の前へ置いた。
「このホテルは持ち込みオッケーなのかい」
「フロントの人は何にも言わなかったわ」といたずらぽい眼で学に答えた。
マリは、学と同じような性格で、それも頭に天然が付きそうな脳天気だ。
そして、遠慮もせず二人の話に入り込んできた。
学は気にせず話を続けた、所詮、週刊誌に出ている話だ、話を中断するほどでもない。
それにマリの仕草はどことなく憎めない、小さな丸顔は、いつでも笑みを浮かべ、愛敬をふりまいていた。
マリは【疑惑の兄弟】と書かれた週刊誌を片手に聞き役に回ってケーキを口へ運んでいた。
「でも、姉さん・・・　田中さんは自殺ではなく、裕太は殺害されたと、八年も追いかけ回して、解けないトリックを兄さんが短い間で解いたと言っていましたね」と学は話の続きを始めた。
「ええそうね」
「どのようにして解いたのでしょうか」
横でこの話を聞いていたマリが「本当に他殺でしょうか」と聞いてきた。
「他殺だと思うよ」学には確信は無いが、そのように、答えた。
「それでは犯人は誰ですか」マリはせっかちな性分か結論を急ぐように言った。
「それはまだ分からないよ」と学は言い、先走りの困った女性だなと思った。
「外から忍び込んだのですか」とマリが聞く。
「それはないね」
「どうしてですか」
「死んだ裕太の家は防犯カメラが付けてあり、
当時のテープの記録には、外部からの侵入者はいなかった」
「外部の者でなければ、犯人は弟の健二ですか」とマリは結論的に言った。

「健二にはアリバイがある、それは事件があった時に三時間も離れた場所にいたらしい」
「何をしていたの」
「兄に頼まれて、ポーカーハウスの下見に行ったようだね」

「それじゃやっぱり自殺じゃないのですか」
またまた、結論つけてマリは言った。
「そこのところなんだよね、この事件が解けないは」
「一人で家にいてどうやって、他人に殺されるのかな」と独り言を言いながらマリは考え始めた。
しばらく三人は沈黙の中にいた。
突然マリが、
「死体を移動したと言うのは」
「どうやって」
「弟が三時間も離れた場所で兄を殺害して、次の日、家へ連れてきて警察へ連絡をする」
「それは、無理だろうね」
「どうしてなの」
「何度も言うように、防犯カメラにはそのような事は写っていないよ、それに、血痕の汚れから現場は動いてないようだね」
「それじゃぁ、時間のトリックは」
「時間のトリックて」
「何時間も前に殺しておいて、浴槽に氷を入れて、その中へ死体を入れ、死亡時間をずらすと言うのはどうかなぁ」
「それもないね、その時、隣の学生が英会話を勉強していて、そのレコーダーに、銃声が残っているので、時間差はないね」
「やっぱり自殺かな・・・でも田中という刑事は他殺で、八年もその事をおいかけているでしょ、何でなの」
「刑事の勘というやつらしい」
「勘かぁ」マリは手元の雑誌に顔を近づけて黙りこんだ。
学の兄孝史はトリックがあると、田中へ言った。
孝史がひらめいたことは何なのか、三人は思い思いに資料を眺めた。
窓辺へ映えていた夕日が、何時の間か月明かりに姿をかえていた。
窓に行き交う車の灯りで、淡く染まる窓ガラスには、兄と同じ閃く明かりは、学には見えなかった。

暫く黙っていたマリが「健二には兄を殺す動機があるのよね」と言った。

「それは、そうだけど」学は生返事をした。
「健二が誰か頼んで、お兄さんを殺したのでは」
「それは無理だろうね」
「健二が手引きをして犯行後、逃がした、例えば、朝、健二が帰って来るまで、部屋にいて防犯カメラを止めて、その隙に犯人を逃がす、ということは無理」
「それもむりだね」
「それじゃ、録音テープを加工するとか」
「テープの加工はないね」資料をマリへ見せて「テープのつなぎ目やカメラのスイッチを操作して、記録をごまかした事は全く見あたらないと、ここに書いてあるだろう」
「カメラの死角はなかったの」
「それは」と、目の前に有るスクラップブックをめくりながら「ああ、これこれ」と指さした。
そのページは、裕太家の平面図が書かれていた。
隈（くま）無くカメラが設置して有ることが、それを見ると良く分かる。
「猫の子でも、侵入すれば直ぐに分かりそうね」とそれを見たマリは納得をした。
ほかに侵入する方法は、ない物かとマリは考えた。
「テープの記録時間外、二十四時間前に裕太の家へ入り込んでいたとか」とマリは言って、自分の言っていることが不可能であり、恥ずかしさを感じて声が段々小さくなった。
それには学も呆（あき）れたが「先ほど言ったように、裕太の家へ出入りした者は誰もいないようだよ、仮にテープの記録時間外に侵入して、エンドレステープの記録が削除されても出て行くときは記録に残るだろ」と答えた。
それは次の日の健二が帰って来て警察が来るまでがはっきりと記録は残っていた。
「それじゃ、当然、足跡も無いのね」
「家の周囲には、健二と裕太以外の足跡は見つかっていないよ」
「指紋はどうなの」と亜里砂が言った
「部屋の指紋も裕太と健二の物だけです」
「全くの陸の孤島なのね・・・ああ、マリさん、紅茶、冷たくなったでしょう、入れ替えてくるわ」とキッチンへ行く後ろ姿に「亜里砂お姉さん、有り難うござい

ます」とマリは言い、続けて学へ「もしも殺人なら、犯人は健二よね」と言った。
「どうして」
「現状は自殺よね、と言うことは・・・金品が盗まれた様子もないので、自殺と判断された。まずこれで、金目当ての部外者の犯行ではない・・・怨恨による犯行となると、八年間も田中刑事が追い続けて、裕太に恨みを持つ者が現れない・・・しかし健二には兄を殺す動機が十分にある」とマリは今までの経緯を締めくくった。それには学も納得するが、健二には完璧なアリバイがある、話は最終的にはここへ何度もたどり着く、幾ら考えてもここから先へ進まないのだ、そのもどかしさをビールの泡と一緒に飲み干した。
「拳銃はどうやって、裕太は手に入れたの」とマリが聞いた。
「裕太はゲーム賭博で儲けた金で、外国旅行へ何度も出向き、カジノや遊女を買うなど豪遊をした後、帰国時に、拳銃を分解して数回に分け持ち込んだらしいよ」
「部品として持ち込むの」
「組み立てた拳銃を自慢げに部屋へやって来た知人に、それを見せたことも分かったらしいよ」

ボールペン

昨日渡った、どぶ川の架け橋を、学と亜里砂は渡っていた。
田中から借りた、スクラップブックを返すためだ。
屋根の赤い、小さな家に田中は待っていた。
「昨日は、どうも、ありがとうございます」とスクラップブックを田中へ返した。
「それで、何か分かりましたか」と田中は期待を込めて聞いてきた。
学の答えは「それが、全くでして」と意味の分からぬ答えになってしまった、折角スクラップブックを貸して貰ったのに、何も答えを見つけられない照れくささに、言葉が詰まってしまったのだ。
肩を落とした姿に「まあまあ、お茶でも」と田中は励ましてくれた。
八年も調べて分からないことだ、そう簡単に学たちが、この謎を解くとは田中も思ってはいないようだ。
「気長にやりましょう」と言って古いアルバムを学と亜里砂に見せた。
「山岸さんと写真同好会の時に、写したものです」
その写真には、兄と田中が肩を並べて笑顔で写っていた。
山峡（さんきょう）に撓（たわ）む名残の雪に、朝日の当たる写真や湖などの雄大な景観が、アルバムに収められていた。
そのアルバムを見ながら、兄の思い出話を田中は語った、そんな話の途中に「ああ、そうだ、これ、山岸さんが忘れていった物です」と田中は突然思い出したように、小物入れの引き出しから、ボールペンを取り出し「この前、来た時に忘れていったのですよ」と田中は言って、そのボールペンを学に渡した。
「山岸さんへ、ボールペンのことを電話で伝えたのですが、送ってくれと頼まれたのですが、どうせ会うのだから、その時に渡そうと思い、忘れていました」

「ありがとうございます」学はそれを受け取り、眺めてみた。
それは安物の黒いボールペンであり、簡単なメモをとるとき使ったようだ。
「今日、帰るのですか」田中に聞かれた。
「はい、これから帰ります、いろいろ、ありがとうございました」と田中に十分な礼を言って、学と亜里砂は田中の家を出た。
兄の忘れていったボールペンを握りながら、どぶ川の架け橋を渡った。そして、もう一度、この橋を渡ることになるとは、その時、二人は思ってもいなかった。
学と亜里砂はホテルへ戻り、帰り支度をしていると、そんな二人のところへマリがやってきた。
「マリも一緒して、いい」と帰りの手荷物を持って現れた。
「そうね、一緒に帰りましょう、たくさんの方が楽しいものね」と亜里砂が答えた。
三人は駅へ向かった、日は高く昇り、秋の日差しが歩道を照らしていた。
兄の殺された手掛かりを見つけに、この町へ来たが、大きな収穫が得られなかった、でも、田中とマリに出会えた。
良い時が過ごせたと学は思い、自販機から切符を受け取って、改札口を抜けホームへ降りると、そこに帰りの列車が待っていた。

家路

田中の東北訛りも、あのどぶ川へ架かる橋も、置いたまま、列車はホームを離れた。
この町へ来るときは、亜里砂と学の二人だったが、帰りはマリも含めて三人の旅となった。
マリは学を亜里砂と間に挟み「両手に花ね」と・冷やかした、これには学も照れる思いがした。
マリは童心なのか、時折おちゃらけをする
そんなマリと、列車の帰り旅は少しだけ、なごんでいた。
車窓からの眺めも、来たときより明るく見え、空の青さが映えていた。
マリは「はいジュース」と向かい合わせに座る学と亜里砂に買っておいた、缶ジュースを勧め、旅の長い時の流れを過ごすため、色々聞いてきた。
「お子さんは」と亜里砂に訪ねた。
「残念ながらいないのよ」と亜里砂は答えた
「ごめんなさい」と余計なことを聞いて、悪く思い声を落とした。
「学さんは結婚されているの」今度は学へ話しかけた
「独り者だよ」
「どうして結婚しないの」
と言われた学は亜里砂の顔を見た、色々あった、学のことは良く分かると言うように、笑みを浮かべ亜里砂は車窓へ目を移した。
「面食いなの」とマリが黙っている学へ聞いた。
「そんなことないよ」
「なら、理想が高いんだ」
「それもないね、ただもてないだけだよ」
「それはないと思うな」
「どうして」
「べつに、もてない雰囲気じゃないもの」と学をまじまじと眺めて「やっぱり、面食いなんだ」といたずらぽい眼を向けた。
「それは絶対ないよ」とむきになって答えた
「ロマンスは幾つかあったと思うわ」と横で二人の話を聞いていた亜里砂が言った

。
「おいらはね、面食いでもないし、理想も高くないよ」学は照れ隠しに話をするとき（おいら）ということがある。
それを見たマリは学をからかうように「それじゃ、マリがお嫁さんになってあげる」
「いいよ、遠慮するよ」
マリと亜里砂は顔を見合わせて笑みした。
「お仕事は何をされているの」
「今はタクシーの運転を」
「わぁ、タクシードライバーか格好いいね」こんなやりとりも、いつの間にか、最近流行のブランド商品や洋服などの話題へ変わっていった。

これには学は内容が分からず、車窓をぼんやりと眺め時を過ごした。
あひる口のマリは良くしゃべり、家路も短く亜里砂の住む駅へ着いた。
「今は一人なので、夕食を食べて行かない」と亜里砂はマリに部屋へよって行かないかと誘った、マリは喜んで着いてきた。
学も亜里砂の手料理を御馳走になった。
テーブルを囲んで、三人は田中から聞いた事件について話し合った。
堂々巡りの話の中で「やっぱり、自殺じゃないの」と投げやりな言葉をマリは言い出す。
これには、学は「それはない、謎が解けたと兄が言い残している」
「そうね、必ず何か、方法があるのね」と亜里砂が言った
「他殺なら、犯人は弟健二ね」と何度となく同じ事をマリは言った。
犯人が健二となると、完璧なアリバイがある
この壁にぶつかり、話は堂々巡りで前へ進まなかった。
学は煙草をくわえ、兄が田中の家へ忘れたボールペンを取りだしメモを書きながら、
「疑問点を整理してみよう」と呟（つぶや）き。
（他殺とされるのは、左手で拳銃を持っていること、死んだ裕太は右利きだった）
（銃弾に、微量なプラスチックが付いていること）
（拳銃に血痕が付いていなかった事）
（裕太には、自殺するほどの、問題を抱えていないこと）
（遺書がないこと）
など、書いてみるが、直接他殺と断定できるものはない。
最大の疑問は、裕太の家へ侵入した者がいない、なのに他殺の疑惑がわいてくる。
弟健二は犯行のあった時、遠い場所にいた。
犯行は健二には不可能だ、と学は思い。
二本目の煙草へ火を点し、キッチンの中を見た。マリはすっかり亜里砂に打ち解けて、肩を並べ、食器を洗っていた。
「今日、泊まっていたら」と亜里砂はマリを誘った。
「いいんですか」微笑みながらマリは言った
「また、女同士の話をしましょう」と化粧品の話でもと、亜里砂は言った。

マリは亜里砂の部屋へ、泊まっていくことになり、学は食事の礼を言って部屋を出た。
辺りは暗く日が落ちて、入れ替わりにネオンの明かりが灯っていた。
今日を思い浮かべ、家路を急いだ、手には疑惑の兄弟と書かれた週刊誌と兄の忘れた、ボールペンを握りしめていた。

マリのケーキ

学はベランダで、昼下がりの香りを混ぜながら煙草を吹かしていた。
兄の仏壇へ、線香を上げ終わったころで。
時折、学は亜里砂の所へきていた、兄の遺品の整理が未だ終わっていないからだ。
趣味の写真が山のようにあった、最近撮ったのか、滝の写真が多く目に付いた。
その、写真を段ボール箱へ入れ封をして、押し入れへしまい込んだ。
写真同好会の田中と別れてから、十日もたった頃である。
チャイムが鳴り、玄関ドアを開け「こんにちは、また来ちゃった」とマリが手土産を持って現れた。
（勝手知ったる、他人の家）で、靴を脱ぐと案内もないのに廊下を進み、リビングへ入ってきた、丸顔のどんぐり眼とあひる口が何故か、懐かしく感じた。
マリは持ってきたケーキを箱から出して二人へ配りながら「あの事件の謎が解けたの」とマリはいきなり切り出した。
「あの事件って、疑惑の兄弟のことか」学は疑いながら聞いた。
「ええ、そうよ」とマリは平然と答えた。
田中が、長い年月を重ねても解けない謎が、そんな簡単に（こんな小娘にと言うと失礼だが）解けるなんて、夢にも思えない「犯人は誰」と結論を急いだ。
「犯人は、やはり弟の健二ね」マリはさらっと答えた。
「健二には、完璧なアリバイがあるだろう」
「遠く離れた、ホテルに居た事ね」と言ってマリはケーキのホークをテーブルへ戻すと、続けて
「それでも、犯行は出来るの」と言った。
「そんな、ばかな」と学は、今まで考えて来たことは、狐にでも化かされていたのか、マリの言っていることは、脳天気な妄想ではないのか、健二に犯行が出来るなんて、信じがたいことだ、頭の中が渦を巻いてぼやけていくように思えた。
冷静に話すマリを見て、何時もの脳天気なマリではないことに気がつき、逸る心を落ち着かせ、言動と行動に集中した。

マリの話を聞き終わった学は
「一刻も早く田中さんへ知らせなくては」と言い田中へ電話をかけた。
「そんなことが可能ですか」と驚いていた。
細かな話は合ってからと言い、田中の家へ、また三人の旅が始まった。
マリは駅で買ったミカンを二人へ勧めた。
列車は見覚えのある景色の中を進んだ。
マリは相変わらず笑みを浮かべ、みかんの皮を剥いていた。
そんなマリを見て、何故、こんなにも短時間でトリックが解けたのか、学は疑問に思っていた。
マリの事は全く分からない、何処で生まれ育ったのか、仕事は芸能関係で平たく言ってモデルだと言っていた。
実際にモデルなのか、その姿を学は見たことはない。
もともと極楽とんぼの学は、それ以上深くは考えなかった。
マリの賑（にぎ）やかな声と笑みが、旅の時間をくぐり抜け、田中の住む駅へ列車は着いた。
どぶ川へ架かる橋を渡ると、赤い屋根の家に田中は待っていた。
「遠い所、ご苦労様です」と座布団を用意した。
「マリです、初めまして」
「貴女がトリックを解いたのですか」
「はい、説明は学さんから」
「私が変わって説明します」と学は概要の説明を始めた。
持ってきた、茶色の紙袋の中を広げ、その中から電話機を取り出しテーブルへ置いた。
田中の部屋にある、電話機を壁のモジュラジャックから外し、用意してきた電話機を、そのモジュラジャックへ取り付けた。
「準備はこれでオッケーです」と言って学は部屋の外へ出て行った。
暫くすると取り付けた電話が、けたたましく鳴った。
田中は受話器を取った、「始めます」と電話の中には学の声がして
「受話器を、テーブルに置いてください」
田中は言われるままに、受話器をテーブルに置いた。

数秒後、受話器から大きな爆発音がして煙が出た、田中は驚いて仰け反った。
「大丈夫です、中に入っているのはクラッカーの火薬ですから」と驚く田中へマリは言った。
「驚かせてすいません」と言いながら学は戻って来て、田中の家へ兄が忘れていった、ボールペンを取り出して、電話機の仕掛けを絵に描いて説明した。
「遠隔操作で特殊な信号を送ると、受話器の中に仕掛けた、火薬が爆発すのです」
「遠隔操作ですか」
「受話器の受信側へ、弾丸の装着された、薬莢（やっきょう）を取り付け、電話機本体に特殊な信号音を感知して作動する機械を組み込みます。特殊な信号を感知するとスィッチが入り薬莢の火薬が爆発します、犯行のあった日、健二は殺害現場から三時間も離れた場所から、午後十一時頃兄へ電話をかけたのです、兄の声を確かめて、この装置で信号を送ったのです」とタバコの箱ほどの信号を送る装置を田中に見せた。
それはスィッチを押すと、ファクシミリの発信音のような音がした。
「この装置で遠くから、信号を送ったのですか」と田中はそのスイッチを何度も押してみた。
「ええ、その信号で受話器の中に仕掛けられた、弾丸が発射されます、その時、兄裕太はメモをとるために、左手に受話器を持ったと思われます」
「それで、銃弾がどうして左から入ったのか、これで納得できますね」
「また、プラスチックが銃弾に微量についていたのは、細工された受話器から銃弾が発射されるとき、受話器のプラスチックをかすめて出て行ったと思われます」
「ははあ、なるほど」
「健二は、兄裕太が死んだ、次の日、何くわぬ顔をして帰宅して、仕掛けた電話機と別の電話機を入れ替えて、警察へ通報したと思われます」
「同じ電話機を何台か買っておいたのですねそして、その一つに裕太が持っている拳銃の弾丸を仕掛けた」
「はい、拳銃の弾丸を盗み取ることは、弟健二には容易いことだと思います」
「ううん、なるほど」と田中は頷きながら感心した様子で「マリさん、良くトリックが解けましたね」

「ええ、マリのお家は電話がかかってくるとピカピカと光るの。そして、ピーピーと鳴るとファクシミリが動き出します、それを見ていて思いついたの」
「でも、この電話機の仕掛けは」
「はい、知り合いの電気屋さんに頼んで、作ってもらいました」
八年の月日が、こんな形で終結を迎えるとは、田中は夢にも思わなかった。
学は、田中の事件が解決しても、兄の殺害の謎は解けた訳ではない。
「今回の事件と、兄の事件とは、関係なかったようですね」と学は呟いた。
兄の孝史はなぜ殺されたのか、これで手掛かりが途切れたか、田中の事件に期待をかけてきた、学は、これですべてが振り出しに戻ったと思いながら、兄の忘れたボールペンで、兄は（何故）と書き、殺された謎を考えてみた。

手に持つボールペンで兄の名前【山岸孝史】と書いたところでインクが無いのか、次の文字が書けなくなった。
「インク切れなの」それを見ていたマリが言った。
「うん、そおらしいね」
学はインクを確かめるため、ボールペンをばらした。
すると、ボールペンのインク芯に巻き付いたマイクロフイルムが出てきた、その瞬間、四人は息を呑んだ。
「現像してみましょう」と田中は座っていた腰を浮かせながら言った。
そして、田中は写真の現像をするため、奥へしまい込んだ写真の現像道具を取り出し、フイルムの現像に取りかかった。
学たち、三人は隣の部屋で、写真の出来るのを待った。
「あの中に犯人が写っているのかしら」
「それだと良いのですが」
学たちは兄殺害の手掛かりが、そこに写っていることを想像して、現像が終わるのを持っていた、田中がふすまを開け現れ「出来ました」と学たちの前へ写真を置いた。
その写真は二十八枚あり、テーブルの上へ広げてみた、それは、何の変哲もない滝の風景写真である、学は兄の殺しに関する、具体的な写真を期待していたのに、期待は大きく外れた、ただ、二十八枚の中に一枚だけ人物が写っていた、それは、釣り竿を片手に持ち、笑顔でカメラへ向いている男の写真だ、
兄の知人なのか、歳は兄より少し若く見える、中肉中背の健康的な浅黒い顔をしている。
「兄さんの知り合いですね、姉さん見覚えありませんか」
「いいえ、私は知らない人ね」
その人物は、田中も知らない者だという。
四人で暫く眺めていたが、そこに隠された謎は、何も思い浮かばない。
結論が出ないまま、学たちは田中の家をあとにした。
どぶ川の橋を渡り、駅へ戻った三人は写真を眺めながら、列車に揺られた。
大きな謎が、その二十八枚の写真に隠されている、学には子供の頃・同様、兄からのパズルの挑戦状に思えた。

写真の謎

線香の薫る、畳の上で、学は兄の部屋の写真集を調べていた。
生前、兄が収集した何百枚ともある、写真とボールペンの中から出てきた写真を見比べていた。
「何かわかったの」と亜里砂がお茶を入れてくれた。
「何枚か同じ写真が見つかりました」とお茶を飲みながら学は言った。
一枚だけ人物が滝を背にして写っている写真を手にして「この写真の男に会えば、兄の殺された謎が解けるのかも」と学が言った
「それじゃ、その男の人を探しに行きましょう」
それにしても、何処へ行けばいいのか、全く見当がつかない。
学がその写真を眺めていると、田中から電話が入った、別れて二週間もした頃であった。
「健二が電話機を買った店が分かりました」と田中の声は張りがあった。
「三台買って、常時二台を兄裕太の部屋と玄関わきに設置して、残る一台を犯行に使ったと白状しました」と田中は電話の中で頭を何度も下げて、八年間の重い十字架が背中から下りたと言っていた。
電話機の向こうにいる田中を見つめ、田中の事件は終わったが、兄の事件はこれから始まっていくのだと学は思っていた。

山小屋

陽が沈むころ、足音がついてくる。
亜里砂は何時ものように、買い物を終え、自宅マンションへ戻る途中だった。その足音は先ほどから、亜里砂と同じ歩調で続いていたが、路地裏に入った途端、急に迫ってきた。
亜里砂は足を速めた、後ろの足音も早くなった、振り返ってみた、その時、後ろから近づいてきた、男に押さえつけられた、そして黒い車の中へ無理やり押し倒された。
必死で声を出そうとしたが、口を塞（ふさ）がれ、声には成らなかった。
車は急発進して、その場所を離れた。
車の窓ガラスはスモークフイルムが貼られ、亜里砂の恐怖は外へは伝わらなかった。それでも、（誰か・・・助けて）と叫び、窓ガラスを叩くが、道ゆく人は振り返りもしない、それでも何度も窓ガラスを叩いた。
「黙らせろ」と車を運転する男が言った。
その瞬間、横へ座る男は亜里砂へ猿ぐつわを付けた、そして両手を縛った。
町並みの光景は時が経つにつれ、緑の木々に変わっていった。
車は山道を登ってゆく、亜里砂は何事か理解ができず、恐怖だけが増していった。
二人の男は殆ど口もきかず車を進めた、やがて、目的地らしき場所で車は止まった。
亜里砂はそこで車から降ろされた、周りは杉林で日が陰っていた。
目の前には簡単に出来た古い小屋があった。
その中へ亜里砂は無理やり連れ込まれ、部屋の中程にある、柱へ括り付けられた。
二人の男の動く姿に亜里砂は驚いた、一人の男の腰に例の星の付いたキーホルダーがぶら下がっていた。
夫を殺した二人組だと思えた、その瞬間怖さが更に増した。
そして、拷問は行き成り始まった。
「亭主から預かった物は」とキーホルダーの男は下を向く亜里砂の顔に手をやり、無理やり上へ向けた。
「知りません」
「預かっているだろ」と別の男が言った。

「何も預かっていません」
「痛いおもいは、したくはないだろう」
「知りません」亜里砂が言い終わったときに男の手は亜里砂の顔を叩いていた。

痛みに耐えて「知りません」と亜里砂は答えた。
実際、亜里砂は夫のことは何も知らない。
今、分かったことは夫を殺した犯人が、目の前にいることだ。
男たちは入れ替わり何度も亜里砂を殴った。「知りません」それ以外の答えは無かった。
二人の男はこれ以上無理と感じ、他人のこの場所に長居は危険と思い。
「どうする」と呟き「仕方ないだろ、顔を見られているからな」と片方が答えた。
亜里砂から離れた場所で話は決まった、そして次の行動は早かった。
亜里砂は目隠しをされた。
「こうすれば、少しは怖さも和らぐからな」とキーホルダーの男が言い、その瞬間から、目の前が、真っ暗な闇の世界と成った。
この時、殺されるのだと亜里砂は感じた。
「死んだ亭主が、待っているからな」と男は言った。
車から灯油タンクを取り出し、小屋の中へ蒔いた、その臭いが、亜里砂の鼻をつく、手際よく男たちは支度をした。まかれた灯油へ薄く汚れた座布団へ火を付けて投げた。
徐々に火は大きくなった・・・
部屋の中が静かになり、車の立ち去る音がした。
灯油の臭いが部屋に充満してきた、その臭いは焦げくさい煙の臭いに変わっていった。火がぱちぱちと燃えている音が聞こえる、そして、それは次第に近づいて来た。
（死にたくない）亜里砂は足をばたばたさせた、体を動かし縄を解こうと、もがいたが、亜里砂の力では縄の緩むことはなかった。
（もう駄目か・・・）
と思うと同時に、煙が鼻をついてきて喉に詰まりせき込んだ。
煙を吸い込まないように息を止めた。
しかし苦しくなって大きく息を吸い込んだ、煙が体中に入り更に息苦しくなった、火はバチバチと音を立て近づいてくる、そして頬を熱い空気が迫ってくる、顔が熱い、息ができない（あなた）・・・　・・・

終着駅

学は朝食後のコーヒーカップを片手に、新聞をテーブルの上へ広げ眺めていた。
電話のベルに受話器を取った、マリの声がした「亜里砂お姉さんは」と聞いてきた。
「どうしたの」
「昨日から連絡が取れなくて」
「うちには来ていないけど」と答えたが、ただならぬ、予感が学の心をよぎった。
「そうなの」と残念そうなマリの声は切れた。
飲みかけのコーヒーを干すと（後で兄嫁の様子を見に行くか）と呟きながら、山中の休憩小屋が、山火事で全焼と小さく書かれた記事の上へ、空になったコーヒーカップを置いた。
新聞の記事には目もくれず、壁に貼られた二十八枚の写真を眺めた。
全ての写真が兄からのメッセージだ、兄が殺された謎はここにある。
一枚だけに、男が写っている、その、男に会えば全てが分かり、そして終わるのか。
謎の終着駅は遙か遠く、二十八枚の闇に隠れていた。

この続きはエブリスタでお読みください。

殺意の鍵

http://p.booklog.jp/book/40600

著者 : 星河　善光
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bee777/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/40600

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/40600

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.